



FRAUMÜNSTER – PREDIGTEN

フラウミュンスター説教

ニクラウス・ペーター牧師

2013年9月22日

説教シリーズ『ハイデルベルク教理問答』第五回 救い、そのイメージと言葉

知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはならず、きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです。

ペトロの手紙一 1章 18 – 19節 (新共同訳)

I.

親愛なる教会共同体の皆さん

ポーランド共産主義時代の作家スタニスワフ・イエルジ・レツ [Stanislaw Jerzy Lec 1909–1966] は、重要な問題を言葉によって先鋭化し、明確化する賜物があった人です。この人が、自身のアフォリズム (格言) 集の中の一冊に、熟考するに価する一文を寄せています。

「自由・平等・博愛！だが、いかにして我々は、活きた動詞に辿り着くのか」。

深い考えです。レツ自身、かつて身をもって覚えざるをえなかったのです：肯定的 (ポジティブ) な言葉も、どれほど容易く凝り固まっては、観念的な空理空論 (イデオロギー) や教義 (ドグマ) として、ほとんど闘争の道具と化すまでになり (スターリン主義)、忌まわしい結果を生んでしまうことか。そう、例えば、フランス革命時代の「自由・平等・博愛」のような輝かしい言葉の数々も、痛ましいスローガンになってしまったことがあったのです。

そこで、このゆえに、今やレツは思案し、問うのです。いかにして我々は、活きた動的な言葉に辿り着くのか、と。「自由 [Freiheit] 」という名詞から、いかにして我々は「自由にする / 解放する [befreien] 」という動詞に立ち返るまでに至るのか—例えば、そこからわたしたち自身が自由をもたらす働きをし、自由をつくりだし、自ら自由となるほどに—。「平等だ」と大言壮語するかわりに、ほんとうに他者を等しきものと受け止め、実際にそのとおりに接するに至るのか。「博愛だ」と吹聴するかわりに、本当に兄弟姉妹のように親身になって人と接するに至るのか。

もう一度言いますが、これは、深い考えです。わたしたちキリスト者は、これを自分たちのこととして次のように翻訳し、また、問うこともすべきでしょう。「信仰、希望、愛—これら三つ！だが、いかにして我々は、活きた動詞に—信じる、望む、愛するという動的な言葉に—辿り着くのか」と。

レツのこの問いに、わたしは感銘を受けています。というのも、全く同じ傾向が、キリスト教信仰においてもあったし、また未だにあるからです。言葉が教義の数々となったときに硬直し、冷たくなっていく。無益に、いやそれどころか危険にさえなっていく…教条主義、宗教裁判、異端者迫害の歴史！いや、イエスのもとでは、信仰、希望、愛はつねに活きた動詞だったはずなのです。信仰は、この方のもとでは、信じることを意味し、神を信頼することを意味し、希望は、この方にとっては、他の人々と一緒に人間らしい世を望むことを意味し、愛は、この方のもとでは、憎むかわりに本当に愛することを意味します。

II.

声高に語っていますが、それには理由があります。というのも、わたしたちは今、「信条・信仰告白プロジェクト」の枠内の、ハイデルベルク教理問答に関する説教シリーズにおいて、教義的なテキストを主題とし、それを読み解いていこうとしているからです。すなわち、わたしたちは、イエスが行いかつ語られたこと（活きた動的な言葉）やイエスのたとえ話ではなく、信仰の要約である教理問答（カテキスムス）を、解釈しようとしています。確かに、一方で、ハイデルベルク教理問答は、生きるにも死ぬにもわたしたちのただ一つの慰めは何か、という、実にすばらしく、個人に人格的に訴える問いに始まる、短い教理書です。そこでは極めて手短に、基本となる見地が三部にまとめられています。すなわち、人間の悲惨、人間の救済（解放）、人間の感謝という三つの見地です。ですが、この教理書もやはり、教義として硬直してしまった言葉や一連の思考を含んでいるのです。

みなさんは覚えていらっしゃるでしょう。わたしは、これまで、いくらか扱いにくい部分は一端飛ばす、と二・三度申し上げていました。というのも、ハイデルベルク教理問答のすぐれた基本構造を、何よりもまず、明瞭にしておきたいと考えたからです。しかし、信条・信仰告白というとき、そこには、理解しがたくなってしまったとしばしば言われるような事柄、もはや語られなくなってしまった事柄もまた、含まれています。そのようなところでは、聖書それ自体に、そしてその生きた動的な言葉と力に溢れた表象に、立ち戻っていくのでなければならないはずで

今、かの冒頭の問い、第一問にもう一度耳を傾けてみるとどうでしょう。「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか」。対する答えは、美しいものです—「この慰めは、わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、イエス・キリストのものである、ということにあります」。しかし、美しい答えだけではなく、付属して次のような説き明かしも続くのです—「この方は、御自分の価高い血をもって、わたしのあらゆる罪を完全に償い、悪魔のあらゆる力からわたしを解き放ってくださいました」。ここで、わたしたちは、はたと立ち止まり、考え込んでしまうのです。「これは難しいな。濃密で、教義的な語り口だ。いったい『罪を償う』とはどういうことだろう。象徴的にとるべきなのだろうか、それとも一々そのまま受け止めなければならないのだろうか。…それに、なんだってまたここに、いきなり悪魔が姿を現すのだろうか」。

III.

ハイデルベルク教理問答の全体の第二部、「人間の救い（解放）について」という題が付されているところですが、そこには、今日多くの人々に理解しがたいという印象を与え、反発すら覚えさせるような章句があります。その中核にあたるのが、中世的な「充足／満足（＝償い Satisfactio）」の教えです。罪ある人間は十分な償いを果たさなければならない。贖い金を支払わなければならない—なんとも奇異な感を与える筋書きです—。人は神に罪によって無礼を働き、その尊厳と名誉は損なわれた。したがって、今や人は罰金を、いやもっと、償い（満足 Satisfaktion）にたるものを、その生命によって、支払わなければならない。すなわち、犠牲（いけにえ）をささげなければならないのだ。だが、汚れなき犠牲をそなえることができるのは神のみだ。そのため、神が人とならなければならない…。これが、充足説の教えの骨子です。

これはわたしが牧会的な対話の中で気付かされていることなのですが、多くのクリスチャンが、このような教義上の考え方に難を覚え、重荷すら感じています。まったく、ひどく困ってしまうのです。そのようなときには、わたしははっきり申し上げたくくなります、「もっとなことです！」と。たしかに、そこには、生き生きとした表象から教義的言説（ドグマチックなスローガン／パロール）への硬化と木質化があるのです。中世の神学者カンタベリーのアンセルムスが考え抜いて生み出したこの教えは、むろん効果的なものではありませんでしたが、キリスト教神学にとって、本当に良いものだったかという、そうでもありませんでした。なぜなら、ここで解放、自由とされる体験、救いのイメージが、それ自体問題含みの筋書きの中で固くなり、ドグマ化してしまうからです。ここでちょっと詳細に踏み入り、ハイデルベルク教理問答が引用している聖書本文に立ち返って見てみることにいたしましょう。

IV.

ペトロ／ペテロの第一の手紙は、解放の深い経験を身をもって知ったキリスト者に向かって語りかけます。あなたがたは内から自由になった、なぜなら、あなたがたは神への帰路を見つけ、赦しと解放とを経験したのだから、と。言葉のイメージは強く、かつ肯定的です。鎖は除かれた。束縛されたあり方、絡み付いていたものは解かれた。過った従属関係は克服されたのだ。そしてさあ、この手紙はこれを一文にまとめ上げるのです。「知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです」（1章18－19節）。

この手紙の書き手が、いかに濃厚な表現をしていることか、みなさんもお気づきのことでしょう。これは、深い宗教的な解放の体験から発せられた言葉です。救いのイメージが、古代に知られていたこの上なく深いイメージによって捉えられています。債務奴隷状態からの解放だ（！）、と。実に、その当時の人生たるや、それは厳しいものでした。戦争の後には、男も女も奴隷とされました。幸運に恵まれた者たちなら、あるいは身内によって自由を買い戻されることもあり得たでしょう。しかし、あまりに多くの債務を抱えてしまった場合は、債務奴隷として売られてしまいました（その収益が債権者の利益となります）。ただし、この場合でも、ときおり、身内の者がこれらの人々を買い戻すということができたのです。自由を買い戻される…なんと強烈な体験、なんと強烈なイメージでしょうか。

V.

これは、内なる解放の体験、恵みの、そして赦しの体験です。自由への買戻し（贖い）のイメージを与えられてはいますが、本日の聖書の言葉には、金や銀によって贖われたのではない、ときっぱり表明されています。この言葉こそ、かつて、キリスト教信仰の土台を形成するものでした—いや、今もそうだと言えましょう。救いの体験、それは、わたしたちにとって、イエスの生涯やその受難の歴史と結びついたもの。それは、信仰・希望・愛という言葉でドグマとしてではなく、活きた動詞として把握したあの方と結びついたものです。あの方はまた、その信仰、希望、愛の可能性が、拒絶、憎悪、争いに出くわすような場面でも、なお信頼し続け、望み続け、愛し続けることをなさいました。たとえそれが、さらに、受苦の道、受難の道になっていくようなときでもなお、です。彼は、わたしたちのためにも苦しみを受け、わたしたちのためにも耐え忍び、わたしたちの争いさえも経験し、そして、戦い抜かれたのです。彼はわたしたちのために、すべてを代理で引き受けてくださいました。これこそ、実に深く、実に輝きに満ちたキリスト教信仰の使信（メッセージ）です。

さてこのメッセージを伝えるために、初代のクリスチャンたちは多くのイメージを必要としました。債務奴隷状態からの贖い、のようなイメージの言語です。さらに、神殿という宗教世界から、犠牲のイメージまでもが、用いられました。そこでは、それによって他者を生かすことのできるような何かを差し出す何ものかがある。それどころか、その「彼」には、自らの命を与える用意すらある。こうして、かの犠牲の子羊、その血について、話が展開していくこととなります。どちらも、解放の体験、新生の体験を指し示すための、深いイメージ、表象です。「彼」のうちに、神ご自身がご自分をお示しになる。自らの信頼、自らの希望、自らの愛の内に、神がご自身を啓示される…。カトリックの信徒が、これに応じてミサ典礼を祝うとき、そこでは、信仰の秘儀—この神秘に満ちた命への転化を祝い、それをありありと現在化すること—が問題となります。

VI.

しかし、それほどに神秘に満ち、深みに至る体験だったものは、言葉を求めていく内に、次第に教義上の真理として、固定化のハンマーを打ち下ろされ、理性（合理）主義的に硬化させられてしまいました。償い—充足を果たすこと、として…。しかし、その場合でも、ここで犠牲が意味するものは、そう、それによって他者が生きることができるよう、人生の中で何かを与える用意をしなければならないということ、何かを犠牲にする備えがなければならないということです。あなたの時間、あなたの熱情、あなたのお金から、いくらかを犠牲としてささげる。あなた

の子供のため、あなたの友人のため、よい計画のため、教会のため、共に生きる生のために！いや、この犠牲は、けっして無意味な無理強いなどではありません。そうではなくこれは、生の実体（リアリティー）です。贈ることを知るものだけが、自身受ける者となる。神ご自身、そのように行動なさいます。神は権力よりは愛をお選びになったではありませんか。弱さの中でこそ強いのが愛だ、とパウロも言いました。ただいくらだけ与えなければならないというのではなく、多くを与えなければならないという状況も、もしやあるかもしれません。神の目的を裏切らないためには、あなたが、その命すらもかけて、負わなければならないような状況も、あるかもしれません。いや、そのために、あなたが強要されることはないのです。しかし、それにもかかわらずあなたは知っているのです、それが必要なことだと…。そしてこのことは、ただ宗教的なことのみ妥当するものではありません。この世界には、紛争や災害があります。そこでは、大胆な人間が、自らを無にする男性、無私の女性が必要とされます。消防隊の傍で、紛争地帯の只中で、警察や、また、兵士たちのもとで、いや、もっと個人的な関係の中でも…。おびただしくも小さな物語、そう、たくさん、公になど決してなることのない物語があります。いや、また、わたしたちが共通に思い浮かべることのできる偉大な物語もあったでしょう。ラテンアメリカの労働者司祭にして司教のオスカー・ロメオ、マルティン・ルーサー・キング、ディートリッヒ・ボンヘフファー、マクシミリアン・コルベ。それらの多くは、イエス・キリストの信徒の中で生まれた物語でした。みな、犠牲をささげた人々だったのです。犠牲、それによってわたしたちは生きています。なぜなら、それによって、悪が勝つことはないと示されるからです。悪は、善によって克服されます。神は、神を信頼し、他者よりももっと多くを与えるような人々を必要としておられます。全く深い愛の倫理、解放の倫理が、このペトロの手紙が求めたようなイメージの言語には、隠されているのです—「知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです」。

VII.

親愛なる教会共同体の皆さん、これは、決して、奇異な筋書きなどではありません。これは、全くもって明瞭たる、大いなる使信の最奥の核たるものです。神がここに現臨しておられるということ、あらゆる場所に！命が愛され、讃えられているところに。わたしたち皆がいかに多くの賜物を与えられているかが、わかっている人のところに。そこからいくらかを戻そう、どんなあり方であれ、いつであっても、それをお返しに贈り届けよう、そういうことが実現しているところに。そのようなあらゆる場所に、神が居合わせておられるということ！

そのような共同性に、そこに属する一人として与るとき—その共なる信仰によって、希望によって、神の愛によって担われるとき—それは、わたしたちに、生きるにも死ぬにも、慰めを与えてくれます。これは明白に改革教会的な、いや、実際のところ普遍的にキリスト教的な、ハイデルベルク教理問答の使信です。そこには、こんなにも多くの自由がかくれているのですから、充足説の教えのように読み飛ばしたくなる可能性がある、それほど成功していないと一見思われるような章句さえ凌駕して、わたしたちは全く嬉しくなってしまうのです。しかし、またずっと大事なことは、この説教のはじめにあたり、最初に取り上げた問いです。さあ、わたしたちはみな、いかにして、信じる、望む、愛するという、活きた動的な言葉に辿り着くのでしょうか。今日に、明日に、明後日にも！

アーメン。

* ドイツ語説教原稿は、フラウミュンスター教会ホームページ (<http://www.fraumuenster.ch>) 「説教と礼拝 Predigt und Gottesdienst」の項で御覧いただけます。『ハイデルベルク教理（信仰）問答』からの引用は、すでに出版されている諸訳をそれぞれ参考にしつつ、説教内容に鑑み私訳をいたしました。本訳文に関するご指摘、お問合せ等は、訳者（大石周平 ohishi_shuhe@hotmail.com）までお寄せくださると幸いです。